

# 「伊東次兵衛の出張日記が語るもの」

— 平成20年4月12日(土)～5月24日(土) 6回開催 —

講師 近世史研究家 小宮 睦之氏

今年4月に刊行しました『佐賀県近世史料』第5編第1巻の責任編集者でもある小宮睦之先生による講座を開催しました。伊東次兵衛という幕末佐賀藩の要職にある人物の23冊にもおよぶ、公私にわたる日記を題材に、幕末のまさに最前線の舞台を解説していただきました。毎回、約50名の参加者があり大変充実した講座となりました。以下に、概要をお知らせします。

## 第1回 4月12日(土)

### 「伊東次兵衛のプロフィールと日記の性格」

次兵衛は文化3年(1806)、濱野家で出生。37歳で母方の伊東家の家督を相続。

嘉永3年(1850)45歳から慶応4年(1868)63歳までの長崎、江戸、大坂への出張を記録したものである。

その後、明治23年(1890)85歳で亡くなるまでの略歴を紹介。

## 第2回 4月19日(土)

### 「嘉永期(1850-1854)の出張」

台場築造や長崎警備の調整のため長崎へ出張。ペリー(米)、スターリング(英)らが外交を求めて相次いで来航。長崎に来航したプチャーチン(露)への対応では將軍から佐賀藩へ褒美。幕府から借入れの5万両も返済不要となる。一方で閑暇には茶会や短歌を楽しむ文化人の一面も見える。

## 第3回 4月26日(土)

### 「安政期(1855-1859)の出張」

品川に台場を築き大砲を長崎から積み出し。オランダから船や銃を購入し、藩でも小型船を造船。長崎で海防の交渉にあたる。

## 第4回 5月10日(土)

### 「万延—文久—元治期(1860-1864)の出張」

文久2年(1862)次兵衛を外記と改名。長崎、江戸、大坂などへ頻繁に出張。長州征討に際しては土隊二百人を率いて出陣。広島総督の謝罪採用について異論なしの書状を「けき 伊東外記」の名で提出。

## 第5回 5月17日(土)

### 「慶応期(1865-1868)の出張」

銃器や火薬の調達、国外の情報収集のため長崎出張。直正の密命により大坂城にて開港反対の意見陳述。二条城で一橋慶喜と面会。フルベッキ(米)を英学教授として雇用を交渉、英学教授場(致遠館)を設置。

## 第6回 5月24日(土)

### 「その後の伊東と伊東の人柄」

討幕軍軍監就任の要請があるが固辞し北山の小隈(大和町)に隠棲。宗徧流茶人として茶を楽しむ。大隈重信は『大隈伯昔日譚』に伊東を「……余等同士と相往来し且幕府の奉行、監察等とも交際したるを以て頗る万事の事情に知悉した。」と述懐。

## まとめ

幕末佐賀藩の動向を証言する日記である。次兵衛は元来高い身分ではなかったが、鍋島直正の信頼は厚く、藩の会計や交渉事に権限を持つ人物となるまでの過程が興味深い。

小宮氏の研究に基づく詳細な解説と佐賀藩にまつわる貴重なこぼれ話などもうかがうことができ参加者の好評を得た。

詳しくは『佐賀県近世史料』第5編第1巻をご覧ください。県立図書館において頒布(¥9,000)、貸出しも行っています。



(文責 佐賀県立図書館)

## 古文書の紹介(9)

かたき う

# 敵討ちの物語

県立図書館(郷土調査担当)では、郷土に関する資料を幅広く調査・収集し、貴重な資料の散逸や破損を防止するよう努めています。収集した資料を保存し、活用することで、佐賀県の学術、文化の発展に寄与することを目的として業務を行っています。そうした資料の中から、今回は江戸時代の敵討ち物語『目達原敵討』<sup>め た ばる かたき うち</sup>を紹介します。

### め た ばる かたき うち 『目達原敵討』

この話は佐賀を舞台にした物語です。江戸時代後半によく読まれたようで多くの写本が残っており、当館にも5本の写本を所蔵しています。今回はその中から平成18年度に当館に受け入れた資料を紹介します。

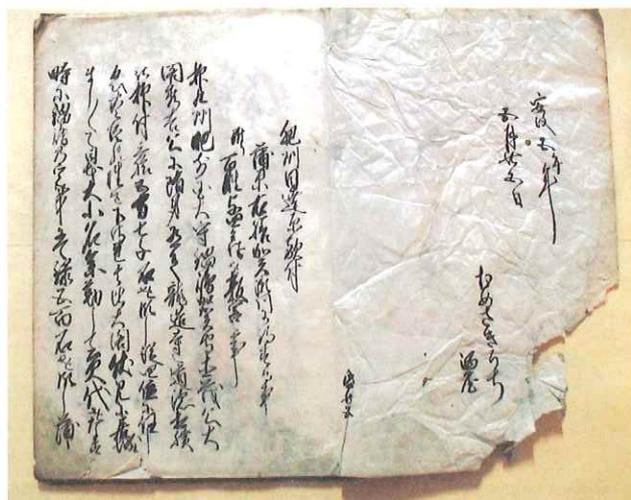
話の中には宮本武蔵や佐賀藩祖鍋島直茂・熊本城主加藤清正などの人物が登場します。巖流島の戦いの後に武雄温泉で休養していた宮本武蔵に、親の敵討ちのために出奔した多久の吉之助が会うという設定です。その後、吉之助は武蔵と共に熊本へ行き修行を積みます。吉之助の評判を聞いた清正が直茂に本望を遂げさせるよう進言し、目達原において両藩主の見守る中、吉之助は敵討ちを実現させています。敵討ちの実録物としても親孝行の物語としても大変面白いものです。

この物語は明治期には実際に起こったことのように考えられていたようです。しかし、昭和2年に出版された『肥前夜話』によれば、年代や年令の食い違いから、創作であると結論づけています。『佐賀県近世史料』では文化・文政期末(1820~1830年頃)あるいは天保期(1830~1844)の創作ではないかと記されています。

『目達原敵討』<sup>め た ばる かたき うち</sup>には、写本がたくさんありますが、内容は大筋でほとんど変わりません。しかし、人名や地名、ルビの振り方や写し間違いなどに細かい違いがあります。そのような違いを調べて写本を系統づけていけば、いつ、どこで、誰が考えた物語なのか、

という疑問の答えに近づくことができるかもしれません。

『佐賀県近世史料』第9編第1巻にも写本の一つが翻刻されています。



め た ばる かたき うち  
『目達原敵討』 (図032) 冊子文書 27.0×19.0cm

『安政五年(1858)五月廿五日』の日付があり、これはおそらく写した日付と思われます。その下の方には『むめさきうち 酒屋』とあり、写した場所か人かの記載と思われます。左のページには『肥州目達原敵討』の題名と第一段落の表題に続いて話がはじまっています。